



薬物依存症者をもつ家族を  
対象とした心理教育プログラム

# 長期的な回復を支え、 再発・再使用に備える

家族の本人に対する関わり方 Vol.2



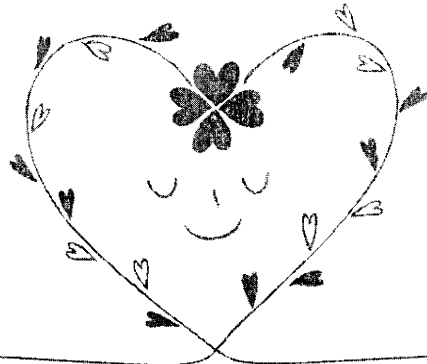
薬物依存症者をもつ家族を  
対象とした心理教育プログラム

# 家族のセルフケア

家族のセルフケア Vol.1

薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム

家族向け教材



薬物依存症者をもつ家族を  
対象とした心理教育プログラム

# 家族のセルフケア

家族のセルフケア Vol.1

薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム

ファシリテーター用マニュアル

海外渡航報告書

研究分担者 和田 清 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所

### 【1】渡航先

マラケシュ (モロッコ)

### 【2】渡航期間

平成 22 年 10 月 22 日～29 日

### 【3】渡航目的

第 20 回世界社会精神医学会議(マラケシュ(モロッコ))に出席し、情報収集、意見交換を図り、その成果を本研究の方向性及び質の向上に生かす。

世界社会精神医学会議は社会精神医学に関する世界最大規模の学会である。世界的に見ると、精神医学の二大疾患は精神病と薬物依存症であると言われることがあるほど、薬物依存症問題は大きな問題である。そこで、研究代表者が出席し、薬物依存症問題の世界的動向等の情報収集を図ると同時に、意見交換し、その成果を本研究班に還元し、本研究の方向性及び質の向上に生かすことにした。

### 【4】渡航旅程

10/22～10/23 萩山→ドバイ経由→カサブランカ

10/23 カサブランカ→マラケシュ

10/24～10/27 第 20 回世界社会精神医学会参加

10/28 マラケシュ→カサブランカ

10/28～10/29 カサブランカ→ドバイ経由→萩山

### 【5】渡航成果

本学会の演題内訳は、シンポジウムないしは口頭発表が 69、ワークショップが 14、レクチャ

ーが 8、ポスターセッションが 147 であったが、薬物依存ないしは嗜癖に関するものは、シンポジウムないしは口頭発表で 2 セッション 7 演題、ポスターセッションで 9 演題と予想以上にすくないものであった。

シンポジウムの演題は下記の通りである。

#### シンポジウム(S XXX)

##### 嗜癖の新たな局面：社会と行動の関連

座長：イタリア、フランス

1. 基本症状、薬物乱用と早期精神病 (イタリア)
2. 文化的観点から見た嗜癖の社会と行動との関連(モロッコ)
3. 行動上の嗜癖：予防から精神病理まで (イタリア)
4. 思春期及び少年期の大麻と早期精神病性障害 (イタリア)

#### 口頭発表(OP V)

##### 嗜癖

座長：米国、モロッコ

1. 司法関連患者における大麻関連精神病 (米国)
2. スピリチュアル強化薬物嗜癖リハビリテーションプログラム(マレーシア)
3. 薬物嗜癖におけるストレスとキューとの相互作用 (米国)

今回の学会は、フランス語圏イスラム国での開催であったが、それが影響したのか、英語圏での国際学会と比べると、とにかく薬物依存に関する演題が少ないことに驚いた。また、dependence という用語は登場せず、すべて addiction であったことが印象的であった。

研究分担者 宮永 耕 東海大学健康科学部社会福祉学科

【1】 渡航先

コロンボ、ガンパハ、ペルマドゥーラ、カルタラ (スリランカ)、クアラルンプール、セランゴール (マレーシア)

【2】 渡航期間

平成 23 年 2 月 14 日～2 月 26 日

【3】 渡航目的

薬物依存に介入する治療施設として、世界的には、Therapeutic Community (TC; 治療共同体) が主流であり、我が国にもその機能は不可欠であるといえる。この TC に関する情報の中でも特に財政構造及び運営について調査するために、特に NPO/NGO 活動として展開するアジア地域での運営状況をヒアリングし、そこで質疑検討することにより、我が国においても今後同種の共同体施設の運営について考察することができる。今回は WFTC より推薦を受けた、15 年以上の運営実績を持つ 2 ヶ国の TC 施設を訪問し、そこでの実践の概略把握と合わせ、運営に関する情報の収集を行った。

【4】 渡航旅程

2/14 成田→クアラルンプール、クアラルンプール→コロンボの移動 (翌日着)

2/15 深夜コロンボ国際空港到着後、受入先の Mithuru Mithuro Movement 創始者、Kuppiyawatte Bodhananda Thero 師に面会し、コロンボ郊外ガンパハ市にある“Nisansala”センターに宿泊し、翌朝より入寮者プログラムに参加し、施設スタッフよりプログラムに関する講義を受けた。その後、Thero 師と共に、約 100 キロ離れた本部のあるペルマドゥーラ市の Mithuru Mithuro 入寮施設に移動、夜到着後入寮者プログラムに参加。

2/16 Mithuru Mithuro の入寮者プログラムに参加し、TC での生活の詳細について学び、スタッフに対して質疑を行う。合わせて滞在期間中のヒアリング調査に関して詳細を調整した。

2/17 Full Moon Poya Day (仏教徒の祝日) にあたり、月に 1 回の特別な施設プログラムが行われ、それに参加した。その中では、沈黙と定時の祈りを中心とした入寮者の生活を参与観察し、スタッフの業務分担に沿ったインタビュー調査を実施した。

2/18 施設プログラム参加による参与観察をおした質疑応答とあわせ、滞在期間に行われない週間プログラム (エンカウンターミーティング等) についてシュミレーションの場面を見学し、スタッフ及び Thero 師とのインタビュー調査を実施、夜間のプログラムでは入寮者の前で研修内容の報告を行った。

2/19 早朝 Mithuru Mithuro 本部発、コロンボ市内の連絡事務所“VOICE”へ移動。同所到着後、市内の公共施設で毎月開催される入寮者の家族ミーティングに参加。その後、南部カルタラ市にある国際トレーニングセンターである“4C Residence”に移動し見学、その後 JTRT (Jinasena Training & Rehabilitation Trust) トレーニングマネジャーの Gamini Bandara 氏より Mithuru Mithuro との共同トレーニングプログラムについて講義を受けた。

2/20 カルタラ南駅より列車にてコロンボ市内に移動、ホテル到着後に市内“VOICE”オフィスのスタッフと連絡を取った。

2/21 早朝コロンボ国際空港より搭乗、クアラルンプールへ移動、到着後 Pengasih Malaysia のスタッフ、Roslan Yahya 氏と電話にて翌日からの訪問について打ち合わせを行った。

2/22 クアラルンプール市にある治療共同体 Rumah Pengasih Malaysia を訪問し、創設者で現 総裁の Mohd Yunus Pathi 氏及び4名のスタッフ と面会し、共同体活動の実際を見学及び運営に関 するヒアリング調査を実施した。

2/23 Pengasih での入寮プログラムを集中体験 するため、早朝より Rumah Pengasih を訪問、ミ ーティング等のプログラムの間に質疑を行い、夕 刻のスタッフミーティングまでに参加して参与 観察を実施した。

2/24 Rumah Pengasih を訪問、午前中のプロ グラムに参加し、組織の財政に関して担当責任者 の Rhazali Md. Jan 氏に対してインタビュー調査 を行う。その後、TCプログラム修了者が地域社 会へ再参入するためのグループホーム、

“Teduhan Kasih” を訪問し、スタッフと入寮者 より施設の機能と現状について聴取した。さらに、 入寮者が作業の一環として夜間市場で物品販売 プログラムと活動広報を行う “KL Downtown Night Market (チュラス地区)” 事務所を見学し た。

2/25 前日と同様 Rumah Pengasih を訪問、 HIV/AIDS の問題を併せ持つ薬物使用者のため に行われる医療機関内のプロジェクトの見学の ため、Sungai Buloh 公立病院を訪問し、スタッ フよりプログラムの概要について聴取した。合 わせて HIV/AIDS の問題を併せ持つ利用者のため 小規模 TC プログラム “Teduhan Kasih Sungai Buloh” と来月より開始予定という農業プロ グラム施設を見学した。その後空港に移動、深夜 帰国便に搭乗、機中泊。

2/26 早朝、成田空港着

## 【5】渡航成果

訪問した2カ国の TC 施設では、純然たる NPO による運営として、国及び地方政府からの運営

費等ランニングコストの支出はなく、必然的に 財政事情は厳しいものだったが、一方でスリラ ンカでは24年、マレーシアでも18年にわたる 実践は、社会的にも非常に高く評価されて今日 に至っている。Mithuru Mithuro Movement も Pengasih もそれぞれ該当国での先駆的かつ、実 質的にも独占的な地位を築き上げており、民間 企業を含めた一般への知名度も非常に高いこと が理解された。

また、13ヶ国で構成される AFTC (治療共同体 アジア連盟) においてもリーダー的役割を果た すこの2ヶ国では、米国で始まった TC の構造を テキストに忠実に展開させ治療成果を上げてい るほか、TCプログラム修了者の社会参入やアフ ターケア (再使用防止)、家族教育プログラム等 の必要なサービスをも発展させてきたことが理 解できた。

なお、TC のスタッフ構成等についても詳細に わたるインタビュー調査を実施したが、Mithuru Mithuro の場合では、80名の入寮者に対し Thero 師を除き5名の有給スタッフで、Rumah Pengasih の場合はやや組織化され70名の Primary Treatment Level 入寮者と同敷地内にある15名 の Re-entry Level の入寮者に対し、Manager 以 下、7名の Director、11名の有給スタッフと9 名のインターンで構成されていた。

両方の TC に共通することはスタッフの立場に ある者はすべて施設でのプログラムを入門段階 から経験し、長期にわたる TC 内でのトレーニン グと中間的評価を合格して役割を得た回復者で あるということだった。日常の共同体内生活に おいては、細部に至るまで入寮者が構成する Job Function によって運営されており、物理的 環境に関しても各種のグループミーティングが 可能なスペース以外に特別なものは必要なかっ た。日本で TC を開始するうえで、必要なスタッ

フ養成については、10名の候補者が3か月間 TC 環境内に居住しながら体験を通して学ぶことで、十分に可能になる、という意見であり、両方の TC 創設者及びスタッフからほぼ同内容のアドバイスを受け、合わせて日本からの候補者についていつでも受け入れる用意がある、との情報を得た。



(別掲5)

## 研究成果の刊行に関する一覧表

## 開発教材

研究分担者名	対象者	教材タイトル
近藤あゆみ	ファシリテーター	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム プログラムを実施する前に (ファシリテーター用マニュアル)
近藤あゆみ	ファシリテーター	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 薬物依存症とは 薬物依存症と回復 Vol.1 (ファシリテーター用マニュアル)
近藤あゆみ	家族	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 薬物依存症とは 薬物依存症と回復 Vol.1 (家族向け教材)
近藤あゆみ	ファシリテーター	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 上手なコミュニケーションで本人を治療につなげる 家族の本人に対する関わり方 Vol.1 (ファシリテーター用マニュアル)
近藤あゆみ	家族	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 上手なコミュニケーションで本人を治療につなげる 家族の本人に対する関わり方 Vol.1 (家族向け教材)
近藤あゆみ	ファシリテーター	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 長期的な回復を支え、再発・再使用に備える 家族の本人に対する関わり方 Vol.2 (ファシリテーター用マニュアル)
近藤あゆみ	家族	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 長期的な回復を支え、再発・再使用に備える 家族の本人に対する関わり方 Vol.2 (家族向け教材)
近藤あゆみ	ファシリテーター	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 家族のセルフケア 家族のセルフケア Vol.1 (ファシリテーター用マニュアル)
近藤あゆみ	家族	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 家族のセルフケア 家族のセルフケア Vol.1 (家族向け教材)

## 書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体 編集者名	書籍名	出版社名	出版 地	出版年	ページ
和田清、尾崎茂、近藤あゆみ	Ⅱ章 物質依存の疫学と法律 物質乱用の疫学	編集: 福居顕二	脳とこころのプライマリケア8 依存	シナジー	東京	2011	20-32
松本俊彦	VII章 思春期における心の問題—薬物乱用	日野原重明・宮岡 等	脳とこころのプライマリケア4	シナジー	東京	2010	448-458
松本俊彦	精神科医療 薬物依存.	精神保健福祉白書編集委員会	精神保健福祉白書 2011年版 岐路に立つ精神保健福祉医療—新たな構築をめざして.	中央法規出版	東京	2010	153

雑誌

発表者名	論文タイトル名	発表紙名	巻	ページ	出版年
Kiyoshi Wada	The history and current state of drug abuse in Japan	Annals of the New York Academy of Sciences	1216	62-72	2011
和田 清	精神作用物質使用障害の今日の実態	精神神経学雑誌	112	651-660	2010
小林桜児, 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 森田展彰, 和田 清	少年鑑別所入所者を対象とした日本語版 SOCRATES (Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale) の因子構造と妥当性の検討.	日本アルコール・薬物医学会誌	45	437-451	2010
今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 平林直次, 和田 清	国立精神・神経医療研究センター病院における物質使用障害治療プログラムの開発と効果測定.	日本アルコール・薬物医学会誌	45	452-463	2010
松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 小林桜児, 和田 清	少年鑑別所における自習ワークブックを用いた薬物再乱用防止プログラムの試み～重症度による介入効果の相違に関する検討.	精神医学	52	1161-1171	2010
松本俊彦	物質使用と暴力および自殺行動との関係.	日本アルコール・薬物医学会雑誌	45	13-24	2010
松本俊彦	アディクションー精神科医が「否認」する「否認の病」.	精神科治療学	25	565-571	2010
松本俊彦	アルコール・薬物使用障害の心理社会的治療.	医学のあゆみ	233	1143-1147	2010
松本俊彦	DSM-5 における物質関連障害.	精神科治療学	25	1077-1081	2010
松本俊彦, 小林桜児	精神作用物質使用障害の心理社会的治療: 再乱用防止のための認知行動療法を中心に.	精神神経学雑誌	112	672-676	2010
松本俊彦	アルコール・薬物依存症と摂食障害との併存例をめぐって.	精神神経学雑誌	112	766-773	2010
松本俊彦	第 2 章 精神作用物質使用による精神および行動の障害 4. 覚せい依存の心理社会的治療.	精神科治療学「今日の精神科治療ガイドライン」	25 増刊	68-71	2010
松本俊彦	物質依存症ー治療戦略に役立つ生活歴、現病歴、家族関係.	精神科治療学	25	1489-1496	2010
松本俊彦	覚せい剤依存症の精神療法ー患者と家族に対する初回面接の工夫ー.	臨床精神医学	39	1583-1587	2010
松本俊彦	マトリックスモデルとは何か? 治療プログラムの可能性と限界	龍谷大学矯正・保護研究センター研究年報	7	63-75	2010
嶋根卓也	思春期の薬物乱用の現状と課題	思春期学	28	267-272	2010
嶋根卓也	薬物依存症ー薬物依存症のトレンドー薬物依存症の予防・防止の社会的取り組み	日本臨牀	68	1531-1535	2010
森田展彰, 嶋根卓也	薬物依存症ー薬物依存症のトレンドー幻覚	日本臨牀	68	1486-1493	2010

	剂				
嶋根卓也	アディクション 薬物乱用・依存	Journal of Integrated Medicine	20	356-359	2010
嶋根卓也	思春期における薬物乱用の実態と予防	思春期学	29	13-18	2011
宮永 耕	薬物依存者の回復における社会福祉援助の役割	龍谷大学 矯正・保護研究センター研究年報 第号	7	99-111	2010
山口みほ	薬物依存症者の回復支援に関わる制度的社会資源の活用実態と課題	医療社会福祉研究	19		2011

平成22年度厚生労働科学研究費補助金  
(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)

薬物乱用・依存の実態把握と  
再乱用防止のための社会資源等の現状と課題に関する研究  
(H21薬一般-028)  
研究報告書  
(総括研究報告書＋分担研究報告書)

主任研究者：和田 清（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所）

2011年3月31日 発行

